

**■聞き取りにくい弱音**

英語の発音は日本語と違うので聞き取りにくいのは事実である。たとえば、President Clinton [prézdənt klíntən]は、英語音に慣れない日本人の耳には、「プレジデント・クリントン」ではなく、「プレゼン・クリン」のように聞えたりする。強音は聞き取れても、弱音は聞き取りにくい。この弱点を補うために、弱音聞き取り訓練が行われる。はたしてこれは効果的に行われるであろうか。

話は違うが、以前私が自動車教習所構内で教習を受けていた時、ウインカーを消し忘れて同乗の指導員にしかられたことがある。ダッシュボードの点滅する電光表示にも気づかず、ピッピッという指示音も聞えなかったのである。指導員は「こんなに高い音が何で聞えないんだ」と言う。しかし、何と言われても私には全く聞えなかった。視野の範囲も同様で、指導員に「もっと広範囲に目を配れ」といくらと言われても、目の前の狭い範囲しか見えなかった。

これらの事実は、未経験者または未熟者にとっては、たとえ現実に存在するものであっても経験者のようには認知できない、ということを示している。英語音も同様である。日本人学習者になじみの薄い英語音、特に弱音は認知できないのである。

**■言語音の知覚**

言語音の知覚に関して、「カクテル・パーティー現象」(cocktail party phenomenon)という事実がある。パーティー会場で、二人が話している場合には、まわりで人がしゃべっていても、これらの話を無視し、自分の話し相手の言葉だけに聞き耳を立てて、これだけに的を絞って選択的に聞き取ることができる。これが「カクテル・パーティー現象」である。現実に言語音が存在しても、これを聞かずに、特定の言語音のみを聞き取ることができる。人間の知覚は、単なる客観事実だけによって行われるのではなく、経験に基づいた訓練によって行われるのである。

弱音の聞き取りについては、さらに驚くべき事実がある。L. Pollack と J. M. Pickett という二人の学者は、「話し言葉は、全体として聞いたときの意味は明瞭であっても、それが何という語か識別できないことが多い」と述べている。彼らの実験によると、普通の会話を録音して被験者に聞かせたところ、全体を通して聞かせた場合には理解度は100%であったが、これを1語1語に分けて聞かせると、その理解度はわずか47%にすぎなかった。しかし、この1語1語の後に後続の単語を加え、さらにその単語の数を増やして、ある意味単位まで達すると、理解度は一気に高まったという。

## ■意味に支配される言語音

すべての言語には同音異義語(homonym)がある。英語にも air - heir; great - grate; lesson - lessen; meet - meat; night - knight; raise - raze; rite - right - write; seen - scene; site - sight; son - sun; sow - sew; vain - vane のような異綴り同音異義語がある。これらの語が発音される時どうして識別できるかという、もちろんそれは文脈によってである。つまり、意味と結びついて初めて、物理音は言語音として認知されるのである。従来考えられてきた「物理音→言語音→意味」の図式は誤りであり、これとは逆の「意味→言語音→物理音」こそが正しい図式であることが分かる。

これは何を示しているかという、先に述べた弱音の練習は、単語レベルで行っても意味がないということである。辞書的語彙(lexical meaning)の単位ではなく、もっと大きな文脈的語義(contextual meaning)の単位で練習しないと弱音は聞き取れない。というよりは、英語国民にも聞き取れない単語レベルの物理音を聞き取る練習をしても意味がない。物理音をいくら聞いても、President Clinton は「プレジデント・クリントン」とは聞えないのである。今までの発想を逆転させて、意味の理解を中心に据えた練習こそ不可欠である。ただし、そのためには時間がかかることは覚悟しなければならない。

©1993 Yukio Saegusa